

「ルネッセ」を総括する

—2年間の活動を振り返って

池永寛明
Kenaga Hiroaki

本誌115号「都市・地域のルネッセ(再起動)に向けて」での提言から始まった「ルネッセ」。理念でもあり実践的行動でもある「ルネッセ」は、さまざまな分野に活動領域を広げ、多くの方々と互いに知的交流を続けながら、未来へつながる実りを生み出してきた。今号では、その総集編として、提唱者でもある池永寛明大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所長が「ルネッセ」を総括するとともに、「ルネッセ」に関わりのある方々からの寄稿やインタビューを掲載し、2年間の活動を振り返る。

加藤しのぶ構成

「文化」とは何から?」 すべてはここから始まった

2016年4月に着任して最初に思ったのは、「エネルギー・文化」研究所の「文化」とは何だろう、ということでした。

文化とは、芸能、文学などと捉えられがちですが、芸術や作品それ自体を指すものではありません。文化の語源は“cultivate”で、「栽培・耕作」を意味します。土地を耕し、種を蒔き、水・養分を与え、収穫し、取り出した種をまた植えるという人の営み、つまり、文化には人間が何らかの活動を繰り返し、承継していくことに本質的な意味があります。

そして、環境や道具の変化に伴い「栽培・耕作」の方法が変わっていくように、文化も環境や時流に合わせて姿を変えていきます。しかし、す

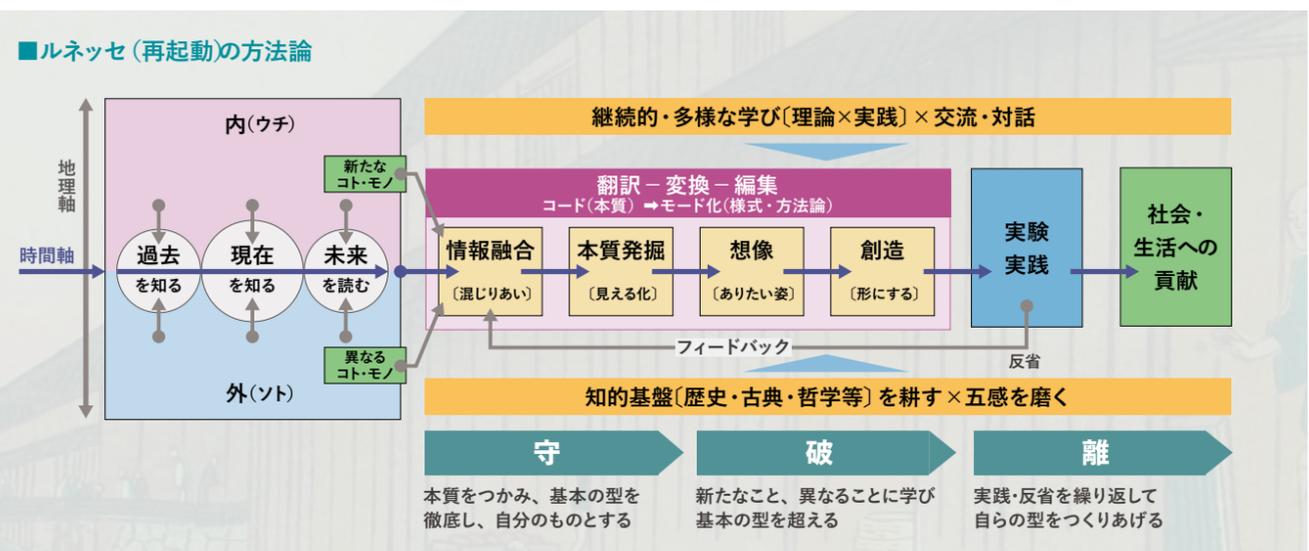
べてを変えるのではなく、「本質」を残しながら、最適化・洗練化していくのが承継の本来のあり方です。

このように文化本来の意味を捉え直すと、現代社会のゆがみの原因が見えてきます。何でもかんでもイノベーションを志向し、「違うこと」「別もの」を求め続けた結果、本来受け継ぐべきものを残せず、「本質」が見えなくなってしまう。現代社会がこれまでの価値観や規範・制度とさまざまな場面で適合不全を起こしているのは、本来受け継ぐべき文化の「本質」を見失ってしまったからではないでしょうか。

停滞する日本を再び活性化させるため、失った「本質」を現代に取り戻そうと、私が提唱したのが「ルネッセ(Renesse)」です。ラテン語の「再び(ren)」と「実在する(esse)」を掛け合わせた造語で、私たちの生活文化の基盤である都市・地



域社会がもっていた「本質」を過去から掘り起こし、現在に合わせて再起動することで、新たな価値を創造しようというものです。



そのための方法論を確立すべく、スーパー・アドバイザーとして協力を仰いだのが松岡正剛さんです。まず、松岡さんからは「過去から現在の1000のキーワード」をあげよとのお話をいただきました。そこで、CELの연구원とともに都市計画・インフラ、交通、食、教育といった大テーマを過去から現在のさまざまな時間軸で縦横無尽に切りながら、キーワードをあげていく作業に取り組みました。

何もないところから1000ものキーワードを考えるというのは大変な作業でしたし、改めて見直す、今ならもっと違う言葉にするなど思うものもありますが、スタート時に自分たちの考えを再定義できたことは、非常に有意義でした。「ルネッセ」の原点はここにあると思っています。

そして、松岡さんからは、3回にわたる巻頭対談で多くのことを学ばせていただきました。日本的な学びのプロセスともいえる「守・破・離」の思想が、編集工学の基本的な思考法であること、そして「守」の説明に「型」は思ったよりも自由だとあつたことが印象的です。これにならない、「ルネッセ」も自由な方法論で進めようと思いました。

こうして始動した「ルネッセ」ですが、もちろん最初からすべてが見通せていたわけではありません。進めていくなかでいくつかの方法論が浮かび、そこから広がり、新たな視点が見つかるという作業を繰り返しながら今につながっていったと感じています。

「フェーズ1」 過去と現在をつなぐ 「現在の視点」に立つ重要性

「ルネッセ」の方法論の基礎は「過去と現在をつなぐ」ことです。ここで重要なのは「現在の視点

から過去をつなぐ」こと。過去を追う研究者はいませんが、ノスタルジーに浸りがちです。私たちは日本を捉え直すために、現在の視点で過去を見返し、今とコンテクストが繋がっているもの、つながっていないものの整理・考察をしていきました。そのなかで「場」——都市を問い直す(116号)、「交」——交流を問い直す(117号)、「耕」——文化を問い直す(118号)という切り口が生まれました。연구원と意見を交わしながら、結果としてとてもいいテーマを選定できたと思っています。

こうした切り口をもとに刊行した各号では、毎回新たな知見や気づきがありました。

まず、「場」がテーマの116号では、「大阪くらしの今昔館」の谷直樹館長と、構匠の三浦史朗さんが宮城県気仙沼市でされた対談が印象に残っています(震災が問う社会と「場」)。被災地における復興、極端に言えばゼロベースで考えていく観点から、歴史や過去の「本質」を承継することの重要性を学びました。またこの対談がきっかけで、気仙沼の復興とまちづくりをテーマに、被災地でコミュニティ再生に取り組む吉田千春さんを講師に迎えてルネッセ・セミナーを行うなど、新たな交流が生まれています。

テーマを「交」とした117号では、現代における「講」を研究されている長谷部八朗駒澤大学学長と、奈良で土木や伝統建築などを手掛ける尾田栄章さん(尾尾田組会長)の「講的なもの」に関する対談が興味深かったです(「講」的集団とかつてのインフラ事業に学ぶ「交」のあり方)。なかでも長谷部先生が、「講」が歴史の文脈で語られるものでなく、現代の日本社会でも必要なもの、と話しておられたのが忘れられません。



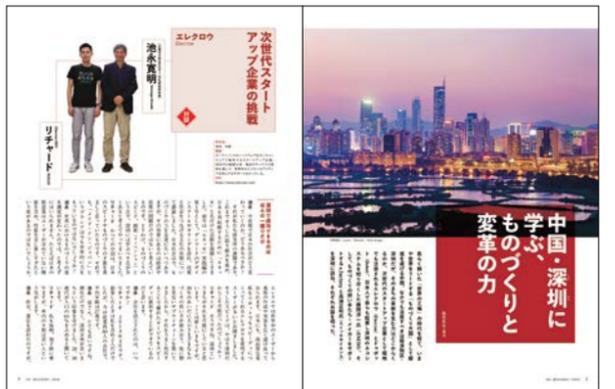
vol.116



vol.117



vol.119



vol.120

「耕」をテーマにした118号は、「ルネッセ」にたびたび登場いただいているイタリアアンシェフの永松信一さんと、映画制作などに携わる小倉美恵子さんの対談です（「人と人、人と風土をつなぐ食文化」）。ここで感じたのは「実践することの迫力」。永松さんが30年近く、食を通してイタリアと日本をつないできた活動の迫力、小倉さんが地域を掘り起こして映像として残していくという迫力、まさに過去と現在をつなぐ実践の重要性をここで学びました。

「フェーズ2」 内と外、日本と世界をつなぐ 「ルネッセ」を物語る言葉との出会い

116〜118号で日本を深掘りしていくなかで、この国の大きな問題として、自国（内）にはある程度詳しいけれども、外国（外）への関心

たちがなすべきことが具体的に見えてきたように感じています。

まずは「情報を多角的に集めること」。都市や地域がもっていた「本質」を再起動するためには、まずそのもとなる情報を集めなければなりません。その情報の断片を融合し、混じりあわせることで、新たな価値をつくりだす下地を生み出せるのです。その情報を集めるための力、そして想像力を働かせるのに必要なのが「五感」なのではないかと思えます。

次に「学びの多層化」。「五感」を養い、想像力を働かせるための源泉を鍛えるためには、学びの場が必要です。それには、さまざまな領域の知が集い、世代や立場を超えた人々が混じりあって学



「上方生活文化堂」開催のきっかけとなった「外国の皆さまと考える“和の住まい文化劇場”——上方の生活文化を感じる1日」（2017年）での書道のワークショップの様子。



「ナレッジキャピタル大学校」は「学校や社会の枠組みを超えた新しい学びの場」づくりを目的として行われ、「ルネッセ」に関わる人々も多く講師として登場した。

が薄いということが浮かび上がりました。そこで次は外へ目を向け、世界で独自の存在感を示す国に学ぼうと、「外に学び、つくり直す」ヨーロッパ編（119号）、アジア編（120号）として、課題解決に向けた実践のあり方について考えました。ヨーロッパ編では、イタリア、オランダ、デンマークを訪れ、世界各国の多様なカルチャーをもつ学生を集めて議論している現場を目の当たりにしました。日本がいかにかにその辺りが弱いということも痛感しましたが、デンマークのデザインスクールCIIIDのCEOシモーナ・マスキさんのメッセージは衝撃的でした。

「技術と社会をつなぐのは『文化』であり、多様な『文化』の融合です」

過去と現在、内と外をつなぐための方法を探るなかで出会ったこの言葉は、まさに「ルネッセ」

ぶ場が必要なのではないのでしょうか。「ナレッジキャピタル大学校」はその好例といえるでしょう。最近では、江戸後期の大阪商人で浮世絵師、戯作者でもあった暁鐘成が知の交換・共有の場として行った「汁講」を復活させた「現代版『汁講』」を開催し、手ごたえを感じています。

最後は「翻訳・編集」する力。これが一番重要で、多様な情報を得て、学びながら現代に新たな価値を創造する作業が必要になるわけです。つまり掘り起こした本質（コード）をライフスタイルなりビジネススタイルという形で、現在に通じる様式・方法論（モード）に変換していかなければなりません。それはベースとなる基盤、プロトコルのようなものがあって成立するものです。変換

を物語る一番の言葉だと思っています。

アジア編では、今、猛スピードで進化し続けている中国・深圳と、国家をあげてSTEM教育に取り組みシンガポールを訪れました。ものづくりのスピードの速さに圧倒され、どちらの国からも食欲に成長しようという熱量に大いに感銘を受けました。ですが一方で、「文化力」がそれに追いついていないようにも感じました。翻って今の日本の状況は、独自の「文化力」をもちながらそれを生かすきれていないだけで、私たちにまだまだなすべきことがあるのではないかと改めて気づかされました。

広がり、展開していく「ルネッセ」

2年にわたる「ルネッセ」の実践を通して、私

という翻訳・編集する力をつけることが大事になってきますが、そのために必要なものやはり「五感」なのではないかと私は考えています。

そもそも日本人は「五感」を働かせて外からの情報やモノ、コト、技術を感性によって磨きあげ、洗練や心地よさを生み出してきました。その感性こそが「五感」です。今、失いかけてつつある「五感」を取り戻すための取り組みが必要なのではないのでしょうか。

そして、「ルネッセ」の活動を通して多くの方々との交流を深め、挑戦的な実践の場の数々を生み出したのは大きな成果でした。「大阪くらしの今昔館」と産経新聞社と協力して開催した「上方生活文化堂」は、過去と現在をつなぐ場として「ルネッセ」の実践例となりましたし、「ルネッセ」に関わる多くの人が参加した「ナレッジキャピタル大学校」は、大阪の学びの源流を明らかにしながらそれを現在に再現した新たな学びの場の創出となったと感じています。

また、「ルネッセ」に共感してくださる企業との新たな交流が多く始められたことも予想外の収穫でした。たとえば、大阪寿司の復権と発展を目指している(株)Mizkan（大阪支店）、自転車のある暮らしで人がもつ力を発揮させたいと願う(株)シマノといった企業と「ルネッセ」の視点を通してつながっていったことは、私たちがなすべきことの実現に大きなエネルギーとなると思いますし、そういう輪がますます広がることを願っています。次からは「ルネッセ」の活動に関わってください方々の寄稿や談話をご紹介します。ここからも、私たちの蒔いた小さな種が大きく咲きはじめていることを感じていただけるのではないのでしょうか。